

西鄉南洲

續集伊藤痴遊全



伊藤忠遊全集

第十六卷

昭和五年五月十五日印刷
昭和五年五月二十日發行

伊藤痴遊全集 第十六卷

(第十五回配本)



(品 買 非)

著 者 伊 藤 仁 太 郎

發 行 者 下 中 彌 三 郎

印 刷 者 濤 川 薫

東京市麹町區下六番町一〇

東京市麹町區下六番町一〇

發行所

東京市麹町區下六番町一〇
振替東京二九六三九番
株式會社

平

凡

社

電話九段

三三一
六四六
四七六
七五四
番番番

第十六卷 西郷南洲

續篇

其後の政府と薩長の軋轢	三
警部連の下鹿兒と私學校生徒	六
西郷の決心と勅使派遣の内情	四
警部連の處分と判事連の活動	七
學校内の軍議と出陣	四
勅使柳原前光の鹿兒島入	一〇五
大阪會議と島津久光	二〇
柳原勅使と大山縣令	一三五
大山縣令の處分と島津の使者	一五六
薩軍の熊本城包圍	一六

籠城の準備と縣廳の移轉	一八九
本丸の失火と兒玉の活躍	二〇〇
熊本土族の保守派	二〇六
池邊佐々の入薩事情	二四九
熊本隊の進退と西郷の着熊	二七〇
熊本隊の編制と西郷の應接振	二八二
熊本協同隊の蹶起と諸士の奇行	三〇四
協同隊の奮闘	三五五
熊本城兵の防戦	三六七
兒玉參議の苦心と穴戸正輝	三八九
乃木少佐の苦戦と聯隊旗	四三四
城兵の突破戦と協同隊の情史	四四六

西鄉南洲

續篇

其後の政府と薩長の軌轢

一

西郷が、去つた跡は、岩倉、大久保、木戸の三頭政治であつた。けれども、岩倉と木戸は、僅に發言權が有るばかりで、政府の實權は、全く大久保の手に歸してしまつた。木戸は、洋行中に、大久保と反目して、歸朝の後も、常に不快の情を以て、大久保に、接して居たが、殊に、西郷が、居なくなつてからは、大久保の力が、伸るばかりであつたから、その勢力は、自然と、長州派を、侵すやうにもなつて、木戸の感情は、倍々、惡くなるのみであつた。

同時に、岩倉も、失意の人となつて、木戸に比べると、一層、實權から離れてゆくのであつた。公卿としては、稀に視るの傑物ではあつたが、政治家の實質に於て、大久保には、遠く及ばなかつた。歐米の文化を見聞して來て、その知見は、廣くなつて居ても、頼りない公卿を、背景として居たのでは、薩藩の上に、踏み跨つて居る、大久保と爭ふには、餘りの微力であつた。

所謂、征韓論の閣議は、偶々三人を、一つに引付けて、西郷一派を、内閣から驅逐する事に、意外の成功はしたが、今となつては、大久保を、押立てる爲に、働いたのと同じ結果になつたのである。

大久保は、頭腦もよく、決斷の力も有つて、表面は、保守的人なるが如く、見えて居たが、その實は、存外に、進歩的の智能もあつて、時の流れに沿うてゆく事も、知つて居た。況して、政府の實權を、すっかり握つてしまつた

から、流石の木戸も、之に對抗する事は、頗る困難になつて來た。

けれども、大久保は、洵に人氣の無い、政治家であつた。人氣といふ點からいへば、西郷が、隨一の人であつた。少數の識者は、西郷や木戸、大久保のそれ／＼の長所と適所を、理解して居たらうが、多くの人々は、何事も、西郷でなければならぬやうに、思つて居たのだ。所が、征韓論の行掛りから、西郷は、政府を退いてしまつたので、その後は、政府の實權が、大久保の手に歸したのだ。三頭政治は、世間體の看板だけで、實は、大久保の政府であつた。それだけに、大久保に對する世間の反感は、強く起つて來た。大久保が、征韓論に反對したのは、西郷を斥けて、自分が、實權を握らんが爲めの、陰險な策謀であつたやうに、考へて、大久保に對する、呪咀の聲は、日を逐うて、高くなつて來た。

政府の内部にも、大久保に對して、反感を持つものは、相當に在つて、岩倉と木戸の側へ、それらの人は、どうしても近づいてゆく傾きがあり、従つて、大久保には、可成り惱ましい事も、引つゞき起るのであるが、さうした場合に、少しも動ぜず、所信を斷行する力は、殊に強かつたので、大久保の位地には、寸毫も、響きは來なかつたのである。

大久保の態度は、餘りに嚴格であつて、些しの隙も、見せなかつた。従つて、有力な分子が、更に出來なかつた。政治家の態度は、嚴正なるほど、まことに結構であるが、たゞ嚴正であるのみでも、いけない。嚴正の間にも、どことなく餘裕があつて、ゆつたりとした大人の風格を備えて欲しい。

大久保に關する、逸話の二つ三つを擧げて、その人柄を、偲んで見たい。

内務卿を勤めて居る間、卓上の灰皿を、一度も掃除する必要がなかつた。誰でも、大久保に逢うて、話したい事を、話し終ると、すぐ歸つてしまふから、煙草を喫むものがなく、従つて、灰皿へ、吹がらや灰を入れるものがない。つ

まり、その態度が嚴格すぎて、無駄話をする餘裕を、他に與へなかつたからだ。

西南の戦争が終つて、岩崎彌太郎の資産が、一時に大きくなつた。之れは言ふまでもなく、大隈が、大藏卿をして居て、大に手加減を、用ひた爲めだが、併し、大隈の上には、大久保が、睨んで居るのだから、大久保も、幾分か緩めて居たに違ひない。それを思へば、大久保へも、少しは行渡りを、つけて置かぬと、後日が恐ろしい、と思つたので、彌太郎は、一日、大金を持つて、それとなく、大久保を訪ふた。然るに、大久保は、例の通り、嚴然と、構へて居て、少しも打解けた所がない。彌太郎も、豪傑風の男ではあつたが、何うも、大久保に隙がないので、その金を、出す事が出来なかつた。空しく其日は、歸つて來て、また、幾日かの後ちに訪ねたが、矢張り同じ事であつた。かくの如きこと數回、終に彌太郎は斷念して、何かの機會を、待つ事にした。そのうちに、大久保は、紀尾井坂の變に、逢ふて斃れた。岩崎家の贈金は、之れで止めになつた。

依頼を受けて、一事を果す毎に、賄賂の御催促に及ぶほど、餘裕が、あり過ぎて困るが、大久保のやうでも、何うであらうか。悪い事に、此威嚴は結構だが、何時も、之れでは困る、他から誤解されたのも、無理はない。

森有禮が、亞米利加から、歸つて來て、一夕、大久保と語つた。その時に、森が、

『君は、藥籠を見ずに、死ぬ人ぢや』

といふたら、大久保は苦笑して、

『左様かも知れぬが、君も、疊の上では死ねまいから、注意したら可からう』

と、言返したので、果は、二人とも、笑つて別れた。

この二人が、同じやうに、刺客の手に罹つたのだから、實に不思議ぢやないか。森は、兎に角、大久保が、極めて宛屈の人で、あつた事は、大概の人は、知つて居る筈だ。

二

大久保が、如何に公正な人物であつても、味方の鼻眞を爲る、といふ事は、何うしても免れない。それが則ち人情と、いふものである。自身では、飽迄も、公正を旨と爲る覺悟があつても、左右に従ふものに、その覺悟がなければ、矢張り駄目なのであるから、一たび、政府の實權が、大久保の手に、歸してからといふものは、日一日と、薩派の勢力が、蔓延つて來て、長州派は、甚だ振はないので、自然、兩派の反目は、日を追ふて、激しくなるばかりであつた。長州派の首領として、木戸の不快は、言ふまでもなく、左なきだに、内閣顧問といふ、薩の人が、多く病氣と稱して、引籠り勝ちなので、長州派の不振は、一層であつた。第二流以下の長州人は、頻りに切齒して、木戸の不甲斐なきを、罵るものさへ、現はれて來た。

當時の木戸は、實に都合の悪い、立場に居たのである。大久保の所爲について、充分に異存はあつても、強て言へないのは、事が、勢力の爭奪に、關して居るから、自分が、大久保と、衝突して下へば、直ぐに政府は、混亂の狀態に、陥るの外はない。西郷派と爭ふて、未だ世人の頭腦から、その跡を、拭ひ去られて居ないのだ。然るに、復び大久保と、爭ふ事になるのは、木戸として、此位みの苦痛はない。而かも、それが、堂々たる政論の争ひでなく、謂はば朋黨にも均しい、藩閥の勢力を、争ふのであるから、常識の發達した、木戸のやうな人には、猪突的に、大久保へ迫る事もならずと言ふて、傍觀して居れば、薩派の勢力が、那邊まで延長るか解らない。木戸の煩悶は、容易でなかつた。

三浦梧樓は、長州派の軍人である。昔は、理窟でも腕力づくでも、他に負けて居るやうな、男ではなかつた。その三浦が、長州派の不平を、代表する一人で、頻りに憤慨して、同志の糾合を謀り、薩派に對抗して居たが、終に堪忍が出来なくなつて、一日のこと、木戸の邸へ、押かけて來た。

木戸は、桂小五郎の昔から、他を使ふ事は、非常に巧かつたが、只だ疳癪の強いのが、缺點であつた。頃日の不平に、疳癪は昂まるばかりで、面白く暮す日とはなく、今日も、南向の庭に面した、廣い座敷の縁側に、夫人を、對手の昔譚、それすら、何となく、浮ぬ色で、動もすれば、應對の外れる事がある。

『眞正に、夢のやうで御座いますね。妾、何うかすると、文久の昔を、思ひ出しまして、何だか、今の身の上、嘘のやうに思はれますのよ。彼の時の事は……』

『もう可いぢやないか。そんな昔譚は、面白くもない』

夫人は、顔を赤くして、黙まつて仕舞つた。平生は、少し位ゐ、機嫌の悪い事があつても、文久の昔譚が出ると、大概は、機嫌が癒るのだが、今日は何うしたのか、それさへ、叱りつけるやうにして、打消して仕舞つた。

京都の三本木に、香りも床しい、名花と謳はれた。抑も幾松の昔から、男優りの俠妓として、木戸の爲めには、劔の刃渡りも、幾たびか、行つての末が、今日の身の上、廟堂に、一日の苦しい勤も、一夕の、松子が慰藉には、氣も心も晴れて、何時とはなしに、快然として語る。それが、平生であるのに、今日の不機嫌は、何とした事か、斯う一喝されては、回復もつかぬ。松子は、手持無沙汰に、黙まつて控へた。木戸も、黙々として、腕を拱んだ儘ま、密と、嘆息を吐く様子が、只事ならずと、松子も、今は、氣を腐らすばかりである。

『御客で御座います』

執次の書生が、手をついて、控へた。

『誰れか』

『三浦梧樓様で御座います』

『ふふーむ、三浦が來たか。可し、之れへ通せ』

書生は、直ぐ去つた。
之れを機會に、松子は立上つて、茶の間へ行つた。

二

三浦梧樓は、長州派の軍人のうちでは、少し毛色の變つた方で、維新當時の事は、左迄にも思はないが、軍人の縁が薄くなつて、政治の方へ、足をふみ入れてからは、その特長が、一層に發輝された。

殊に、明治二十九年の、朝鮮王妃を殺した、一條の如きは、最も三浦の性格を、顯はしたものであらう、と思ふ。身は、苟も公使であつて、その一言一行は、直に國際上の、關係を生ずるのだ。それを、承知の上で、軍人や警官に、内意を啗め、岡木柳之助等をして、拔刀を提げて、王宮に闖入せしめ、王妃閔氏を、殺害して仕舞つた杯は、世界に、殆んど例を見ざるの、珍事件ではないか、如斯ことが、普通の公使に、出来るものでない。其事の可否は、暫らく措いて、慥に奇抜な公使とは、言へるだらう。

之れが爲めに、廣島の獄に入れられて、免訴放免にはなつたが、其後、日韓併合の時、樞密院顧問官に、なつたのは、何となく他をして、奇異の感を抱かしめた。

却説、木戸は、三浦と對坐で、何か頻りに、話して居たのだが、三浦は、突然、一冊の書物を、木戸の前へ、投げ出して、

『之れを御覽下さい』

『何ぢや』

木戸が、手に取つて見ると、それは、官員録であつた。別に見た所では、不思議もないやうに思つた。

『之れが、何と致したか』

『役各の上に、赤と紫の點がある。それを、何と見られるか』

『えッ』

果然、小さな點がうつてある。三浦の膝は、グツと進んだ。

『赤い點が、薩藩ぢや』

『ふゝむ』

『紫の點は、我が藩ぢや』

『ふゝむ』

『那方が多いか、熟く御覽下さい』

此に至つて、木戸は、何とも答へない。只だ太い息を、漏らすばかりであつた。

『維新の大業については、決して薩藩に譲らぬ。我が藩が、何の理由あつて、斯くの如く、薩藩の下風に立つのか、それが、僕等には、解らないのぢや。役所の要部には、皆な薩藩の人ばかりで、我藩のものは、いづれも其醜下となつて居る。人數も、大分に違ふやうぢや。貴下は、大久保に、何で遠慮を爲さるのか、それが第一に、我等の不平ぢや。近來の大久保は、實に不謹慎極まる、仕方のみぢや。我等は、大久保の眼中に、ないのみならず、貴下さへ、動もすれば、閑却される如く見えるのは、畢竟何の爲めであらうか。我等は、既に大決心を、致して居る。先づそれを、貴下に打明けて、我等は、處決し度い、と思ふて居るのぢや』

三浦は、肱を張り、肩を怒らせて、虹の如き、氣焔を吐くのであつた。木戸は、只だ黙々として聞いて居たが、三浦が、猶ほ進んで、何事か、言はう、と爲るのを制して、

『マア、お待ち』

『イヤ、今日は……』

『まア、さう急かんと、鳥渡待ちなさい』

此に於て、三浦は黙まつた。

『宜しい、よく解つた。これは、我輩が悪かつた。餘り放任に過ぎたので、斯ういふ事になつたのぢや。何とか致さうから、少時見て居て呉れ』

『何うなさるのか』

『何うでもよいから、まア、任せて置いて呉れ。君等の顔が、立つやうに爲る』

『僕が今日言ふたのは、皆が堪へて居る。それを代表して、言ふたのぢや』

『よく解つた。何とか爲るから、今日は、歸つて呉れ』

木戸が、之れ迄に言ふので、三浦も、其日は歸つた。

四

それから、四五日経つと、木戸は、内閣へ出た。何となく顔色が悪い。木戸は、大久保と異つて、話好きならば、極く愛想の良い人であつたが、今日は、何うしたのか、苦い顔を、して居るので、屬官の人達は、可成く附近へ、寄らないやうにするから、木戸は、只だ一人で、寂しく控へて居た。

『ハッ、大久保公が、御見えになりました』

『左様か』

と、言つた限りで、黙まつて居る。

『如何いたしませうか』

『御見えになつたら、御案内するが可い』

屬官は、妙な顔をして引退つた。暫らくすると、大久保が、這入つて來た。

全體が、議論の多い人で、あつたのだが、安政の昔、藤田東湖を訪ねて、自分の缺點は、何ういふ所にあるか、と、問ふた時に、東湖の答へが、

『足下は、多辯で不可ん』

と、言ふた。それからは、自らを慎んで、果は、寡黙の人になつたのである。

木戸に、會釋して席についたが、何も言はずに、木戸の顔を、熟と見て居る。木戸の方でも、黙つて居る。大久保は、癡て口を開いた。

『貴下、顔色が悪いやうぢやが、病氣でもして居なはるか』

『左様、病氣で、困つて居ります』

『ははア、そりや、何ぎや病氣で、ごわすか』

『その病氣といふのは……』

『ふむ』

『之れです』

傍の風呂敷から、例の官員錄を出して、大久保の前へ置いた。

『病氣の原因は、之れです』

『何ッ、病氣の原因が、之れでござす、と』

大久保は、手に探つて、開いて見る、と、朱と紫の點が、役名の上に、うつてある。明敏な、大久保の頭腦には、

それと、直ぐに解つた。

『大久保さん、御互に苦勞して、今日の政府を造つたのぢや。泰平の世に、なつてからの樂しみも、苦勞と同じやうに、しようぢやありませんか。貴下が、同藩の人を愛するの、我輩が、長防人を思ふの、その情に變りはないからな。只だ其樂みを私しせぬ、といふのが、御互ひに、注意す可き點で、御座るよ』

流石の大久保も、これには、即答が出来ず、腕を組んで、首を下げて居た。木戸は、極めて沈んだ調子で、『征韓論の爲めに、西郷さんは、彼アいふ事になつた。この上に、貴下と我輩と、争ふやうな事があつては、それこそ、板垣や副島に、笑はれますからな。政治の大方針についてなら、それも可いが、役人の割振に、ついでに争ひでは、世間のものにも、知らせる事が出来ぬ。苦しい情を抑へて、御互ひに、睨合ふて居るのも、愚の至りぢやからな』

大久保は、組んだ手を、膝に下して、太い息を吐いた。

『や、木戸はん、……己どんの過失ぢや。左様いふ心では、なかつたのぢやが、己どんの仕方が悪かつたので、貴下を苦めたのぢや。深く注意して、改むる事に爲るから、まア、見て居て下はれ』

『左様いふ心であるなら、我輩も安心ぢや。實は壯い人達が、背かぬのでな』

『御尤ぢや。宜しい、一時に何うする、といふ事も、なるまいが、何とかしよう』

『貴下に、其誠意がある上は、何事も言はぬ』

『この上に、氣のついた事は、遠慮なく言ふて下はれ』

幸ひに二人が、普通の人でないから、喧嘩にはならないで、表面は、美しく別れたけれど、實は、心の底まで、果して打解けたらうか。それは、甚だ疑はしいのである。

その後、大久保の注意で、要所々々の役人に、大部更迭があつて、略ぼ平均が、取れるやうになつたから、長州